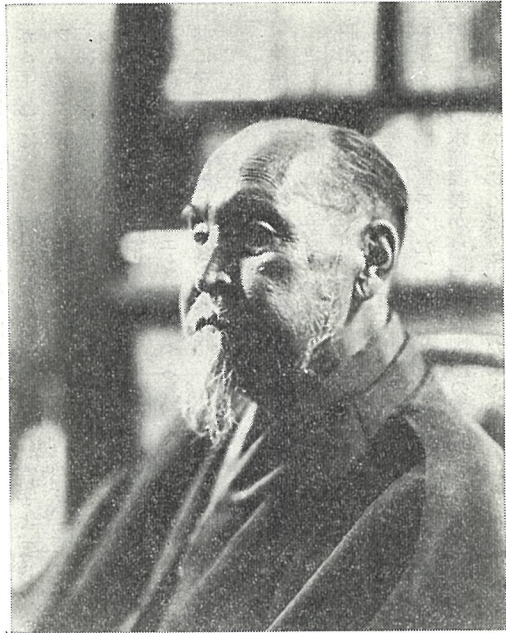




同志社人物誌 (22)

湯 浅 吉 郎

湯 浅 永 年

元治元年

寺小屋でも学んだが、四男なので分家して呉服商を開く予定で、店となる家屋も準備されていたから、高崎の呉服商へ見習いにやられた。しかし二年ほどで逃げ帰えり、以後三年間、新井白灣塾に入り、経書を学んだ。

明治七年

年末に新島先生帰朝。安中に四週間滞在。伝道の第一歩を開始された。数十人の入信者があり、湯浅家も全員加わる。特に母茂世の信仰は篤かった。安中教会は海老名弾正師が、同志社在学中から手掛けたのである。

明治十年

同志社英学校に入学。後に政治や科学、実業面に進んだ純英学グループではなく、また神学を専門とする信仰組でもない。一級上の徳富猪一郎や大西祝と組んだ、少数の文学グループを作った。

英文学は山崎為徳氏や宣教師たちから導かれたが、たまたま三十四才の老書生で桂園派歌人池袋清風が、神学校へ入学して来た。同

父、吉郎のことを書けとの注文を受けた年が譜とその説明で許していただきたい。

安政五年

安政五年二月十六日、群馬県安中に生れる。藩主は板倉侯。湯浅治郎吉の四男だったが、長兄治郎と二人だけが成人して、その間の子供は皆幼くして死んだ。従って治郎との間に

年齢の開きがあり、若年にして家業ならびに社会的に活躍した兄は、第二の親のように思われ、対立的に晩成型となり、一生厄介をかけたのである。

「父母に代りて叱りたまひけむ

其愛しみわれ忘れめや」

昭和七年兄に先立たれた時の歌である。家業は味噌醬油業で、藩の金融も引受けていた。

志社の和歌熱は燃立ち、女学校や神戸女学院にも飛火して、歌稿は宮内省の御歌所に定期的に送られて、寄人たちの添削を受けていた。ミッシオン校には讃美歌もあり、新英州の宣教師は詩人を尊重するので、歌道は奨励された。新島先生も漢詩と和歌はたしなまれた。その代り清教徒的に、恋愛小説や演劇は極端に排撃された。文学グループでは同輩の眼を遁れて、芝居を見、円朝を聞き、近松や西鶴、馬琴を共同研究しなければならなかった。夏休みに帰郷せず、清滝に籠城して読みふけた。芦花もこの例に従った。池袋門下の歌集は「浅瀬の波」と題して、後に二冊本で出版された。

かような状態なので、父と徳富とは卒業前に東京へ進出しようとして、あつかましくも新島先生に挨拶に行ったという、有名な事件を引き起した。蘇峰は成功したが、父は引きもどされて神学校に進んだ。なお明治十八年には兄治郎は徳富の姉初子と再婚している。同志社女学校第一回卒業生である。

明治十八年

六月同志社を卒業。普通科五年、神学科三

年。最初の正式神学科卒業生は父一人だけだった。専攻は旧約聖書で、文学が多いからだ。卒業論文として朗読したのが新体詩「十二の石塚」である。旧約「士師記」を十二段の叙事詩として歌ったものだ。最初の卒業生が牧師でなく、日本で初めての洋風詩人として現れたので、宣教師たちは涙を流して喜んでくれたとのこと。「十二の石塚」は兄治郎が安中で同年単行本として出版した。

ところが大正時代になって、明治文学史が学界で取上げられて、創作新体詩としては最初のものであり、出版物としても番付け第一号と定まった。今日古書として非常に珍重されており、時価十四万円で落札された。

八月十二日父治郎吉死去。享年六十五才。九月横浜出航米国に向かう。同窓の下村孝太郎氏と同行。

ノースウェスタンを経てオベリン大学でPh.D.の学位をとる。引き続いてエール大学に進み旧約と古代語を専攻 Ph.D.の学位を得る。アッシリヤ語を彫った瓦板を和紙を用いて拓本にとり、読易くして喜ばれた。

明治二十三年

新島先生死去。

第一回国会議員に出ていた兄治郎は、京都に移って同志社の財政面を引き受けた。

明治二十四年

エール大学卒業。論文は「箴言の分類」。帰朝後同志社神学校で旧約を担当する。

古都京都に帰った父は、伝統的な日本趣味に引かれたらしい。庭いじりから、盆栽や水石に向かった。次には谷口鶴山について南画を学ぶ。その頃の京都は、文人画の天下で、四条派等のきれいな絵が勢力を得たのは、文展等が始まってからである。絵は一生描いたが、その南画は清朝風の細いものだった。もちろん他人様に頼まれて描くのだから、小品が大部分だが、群馬県の半田家等では、四枚つづきのふすま絵も残している。

後年図書館長になったので書誌学と並んで古筆、古美術にも進んだ。また展覧会を催すので、新画の作者とも広く交際した。直入、鉄斎、松年、景年らに識られ、栖鳳、春挙、米偃らの仲間だった。要するに時代が良かったのである。洋画の方も、浅井忠について習っていた。また甥の一郎（校友）が二科会の

創立員だったので、その京都展は第一回から図書館で世話した。二科には安井、梅原らの京都出身者がいたからでもある。それに続いて白樺の同人も、ロダン展その他を持ちこんだので、新しい洋画壇とも接触していた。

明治三十二年

同志社では二代目小崎校長の辞任、横井内閣の総辞職等と、大問題が重なり、父も辞職して平安教会の牧師となる。ただ一人兄治郎だけは、新島先生の遺志を担うて、経営の責任を続けなければならなかった。

教壇に立つて説教と聖書を朗読するとなると、発声を研究しなければならない。茂山千五郎について狂言を習ったが、謡曲と茶は誰でもやるので手控えた。父の平凡を嫌うつむじ曲りが現われている。ところが日本語朗読に貴重な金鉱を掘当てた。それは平家琵琶である。京都御所職屋敷の最後の波多野流検校藤村性禪師が、細々あんま業をやりながら、生きていたことを知ったのである。明治三十三年から検校の死の四十四年まで学んだ。そして三十八年には平家三十六巻全部済の免状を貰った。全部済は父で終ったのである。今

日のようなテープ・レコーダーがあったらと惜しまれる。

明治三十四年

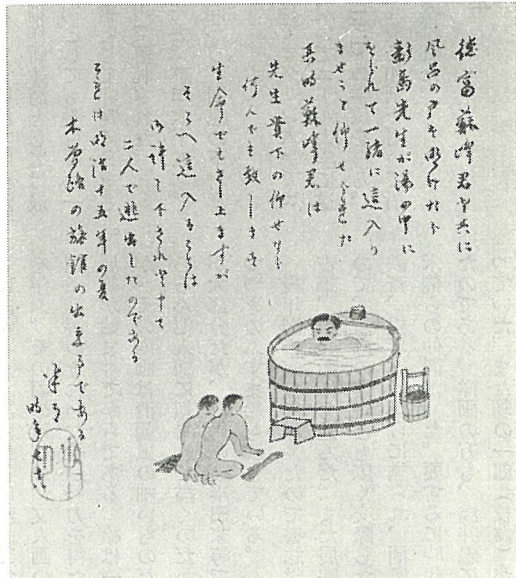
平安教会を辞す。

そして新設の京都帝大法学部講師となる。しかしそれは表面だけで、図書館創設の仕事をしたのであった。同時に同志社女子部でも、シェークスピアから国文まで、講師として教えた。

明治三十五年

新体詩集「半月集」刊行。帰朝後も同志社文学や国民之友等に時折寄稿していたのを集めたもの。半月とは楽器琵琶の異名。

当時米国の大学で始った図書館学を学ぶため再渡米した。エールでの恩師ハーバー博士がシカゴ大学創立の総長となられたので、そ



入浴の図 (湯浅半月画)

の招きで行ったのである。翌年は十進分類法開拓者のデュウィーにも、直接学び、米欧の図書館を見学する。シカゴでの講義プリントは同志社図書館に寄贈した。

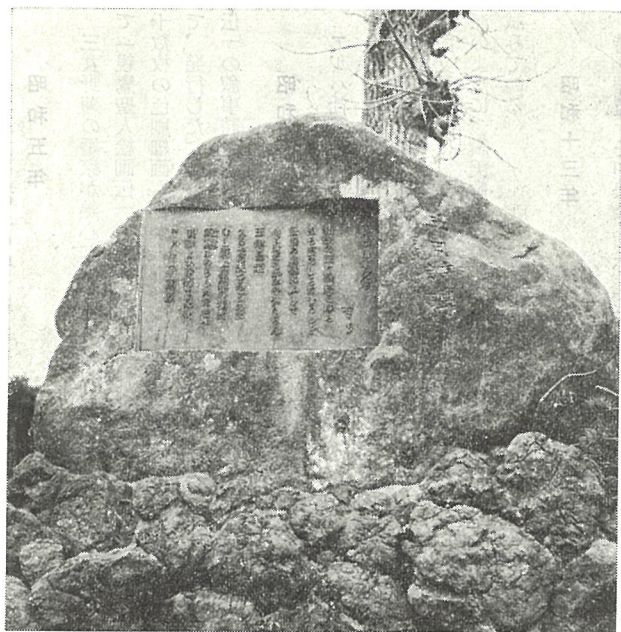
明治三十六年

帰朝。京都府図書館長に就任。京都工芸学校の講師も兼ね、英文で西洋美術史等を読ませた。同時に同志社女専にも関係していた。

明治四十年

「箴言講義」刊行。エール大学卒業論文。

岡崎公園に図書館本館完成。当時最新の設備を誇り、分類も新しく、特に和書分類は独特のものであった。古版本、新古美術の展観を



群馬県安中市にある半月「十二の石塚」の詩碑

次々に催して、社会教育に進出した。そのため東京方面から、多数の学者、文化人の来訪が続いて、館長室は常に千客万来、祇園方面の案内役もさせられ、文学芸者なるものも用意されていた。大正三年には、京都叢書十六冊を刊行。地誌紀行関係古文獻の大集成である。

大正七年

大森知事が辞職したので、父も辞した。そして単身上京、早大図書館の新館建築と整備に当る。浮田、安部らの同志社人もおられたが、市島謙吉、坪内逍遙と交際していたからである。大正八年には「書面質物語」を刊行。京都の秘話を暴露して、東都人に冷水を浴びせたのだ。蘇峰、魯庵らの序文が附いている。

大正十年～十二年

早大の仕事が終ったので、逍遙や春城の依頼で演劇図書館設立準備のため、俳優組合の世話をする。今日の歌舞伎名優の中に、子供の時父に教育された者がいる筈だ。大正十一年には、組合の事業として、月刊雑誌「劇」を編輯する。特大版色刷写真も入れた豪華雑誌であったが翌年夏までで、大震災のため、組合そのものと共になくなってしまった。

大正十二年

六月警醒社から「雅歌」を刊行。韻文による聖書の新訳の第一書である。大震災で東京が駄目だから翌年大阪に移り、「猶太研究」という個人雑誌を編輯発行したが、三号雑誌で終った。昭和三年には、警醒社から「コーヘレスの言」を刊行、聖書伝道の書の韻文訳。

昭和四年

上京して兄治郎の家に留まる。年末には筆者も長い米国学から帰った。父は単式印刷会社の顧問をしていたが、図書専門家として、新式の印刷術に興味をもったのであろう。

昭和五年

三女野菊の婚家が熱心な真宗信徒だったので「親鸞聖人絵詞伝」という叙事詩を作り、十数枚の色刷細画も自から描いて、単式印刷で、発行した。続いて聖人の妻「恵信尼絵詞伝」の叙事詩も刊行。

昭和十一年

アルパ社から「箴言」と「ヨブ記」の二冊を出版。昭和十二年には「伝道の書・雅歌」及び「詩篇」の二冊出版。詩篇は正文の普通の韻文訳と共に、詩篇歌として、カルヴィン派のように、讃美歌風に唱い得るものも別に試みている。

昭和十三年

詩「煙魔」を中央公論に、また「天宇受売命」を河合醉名の雑誌女性時代に寄稿。

昭和十四年

教文館から「予言詩第二イザヤ」と「予言詩イザヤ書」の二冊出版。

「偶像に就きて」「女性の哀歌」の二詩を「女

性時代」に、「日本人の読書法」「書物の貸借と盗難」の二文を丸善の「学燈」に寄稿。昭和十五年の同志社の「新島先生記念集」には「見へざる神の御手」と題して、先生の生涯を叙事詩にして寄稿した。

昭和十六年

「日本最初の歌」「詩の朗読」「十二の石塚」を女性時代に寄稿。宝雲舎の雑誌「茶わん」には、京都画壇に関して「直入・謫山」「御宸画」「書画に関する文学」「洋画家・鉄斎」「最後の平家琵琶」等を毎号書いた。

昭和十八年

二月四日老衰のため、東京中野で死去。享年八十六才。墓は郷里安中にするに自分で建てていた。「吾ゆかは天には父のましましてかしこし神の子としたまはむ」と刻ってある。年頭に「十二の石塚——処女出版の思出」なる文を、興文に寄稿しているが、これが不思議にも絶筆となった。

以上のように中年期には多趣味に発展して、神学を忘れ、詩を忘れたように見えるが、

晩年には再び結合して、首尾バランスを取ったことを喜ぶ。また日本人として洋風の学校教育を早く受けたものの能力が高齢に達しても、衰えないことを実証してくれた点も心強い。外国語も使えは忘れるものではない。父は詩歌についても信仰についても、理窟を極力嫌った。学者振らないので、多くの人々と交わり愛されたのである。

遺稿

「我家の人々」(自伝。原稿は戦災で焼失した)

「半月歌集」「福音百首」(マルコ伝による和歌)

「教訓百首」(マタイ伝ルカ伝による和歌)

「神代の歌」(古事記の文語詩)

「古事記の大神話」(古事記原文を詩の形に配列したものと、口語訳の二種)

「エレミヤの哀歌」(完訳)

「ルツ記」(完訳)

「エステル記」(完訳)

「エレミヤ記」(第四十九章まで、未完)

(校友・女子大学嘱託講師)